

薬事情報センターのページ

“新しく”、“適切な” 医薬品等情報の入手と提供（第35回） 今、流行っている感染症 どう調べる？どう対処する？どう学ぶ？ ～情報入手、情報活用について～

薬事情報センター
Web サイトは、
スマートフォンでも
閲覧可能です。



COVID-19流行時には、既報（広島県薬剤師会誌 2021 Vol.46 No.4、広島県薬剤師会誌 2020 Vol.45 No.3にて報告）の通り、薬事情報センターには、一般県民だけでなく、医療関係者からの問合せも増加しました。その後も、何かの感染症が流行る、その感染症に絡んだ報道（今年であれば、百日咳、ワクチンの定期接種化等）がされる度に、不安を感じる患者さんや医療関係者からお問合せがあります。

加えて、感染症の流行により薬剤の供給が不安定になることが増え、抗微生物薬も例外ではありません。例えば、第一世代のセフェム系抗菌薬が処方されたものの、限定出荷で入手困難な場合、代替薬を選定する際にはどのような情報を参考にされていますか。

果たして、日本では、世界では、今どんな感染症が流行っているのか？広島ではどうなのか？かかりつけの患者さんが海外渡航する時どうアドバイスするのか？等々、感染症に関する情報が求められる機会は多いかと存じます。

そこで今回は、常日頃からどのような情報をモニタリングし、どこから入手するのか、抗微生物薬を用いる場合の薬物選択の判断基準として何を参考にすればよいか、そして、感染症について学ぶ手立て等についてご紹介していきます。

[Abstract]

1. 今、どんな感染症が流行っているか

⇒感染症サーベイランスをチェックしよう

- ・日本：
 - ・厚生労働省 > 健康に関する支援 > 感染症情報
 - ・国立健康危機管理研究機構（JIHS）> 感染症情報提供サイト > サーベイランス > 感染症発生動向調査週報
- ・広島県：
 - 広島県感染症・疾病管理センター（ひろしま CDC）> 感染症週報（バックナンバー）



2. その感染症は、どんな病態で、どのような治療をするのか

⇒JIHSや関連学会の診療ガイドラインや提言等をチェックしよう

- ・国立健康危機管理研究機構（JIHS）> 感染症情報提供サイト
- ・日本感染症学会 > ガイドライン INDEX
- ・感染症等関連学会の診療ガイドライン・学会からの注意喚起等
- ・ガイドライン検索では、Minds ガイドラインライブラリ（日本医療機能評価機構）を活用



⇒抗微生物薬選択では、患者背景を考慮し、最新の対応策を参照しよう

- ・書籍『今日の治療指針2025』
- ・書籍『JAID/JSC 感染症治療ガイド2023』
- ・抗微生物薬適正使用の手引き第二版本編（2023年12月20日）
- ・AWaRe（アウェア）分類～薬剤耐性の影響を考慮したツール

3. 感染症について学ぶには

⇒厚生労働省や各種感染症関連サイト提供の Web 学習や次の参考サイトから学ぼう

- ・感染症対応に係る薬局の研修について（厚生労働省）
- ・国立健康危機管理研究機構（JIHS）>
- ・薬剤耐性（AMR）について学ぼう！（AMR 臨床リファレンスセンター）
- ・予防接種に関する情報（日本ワクチン産業協会）

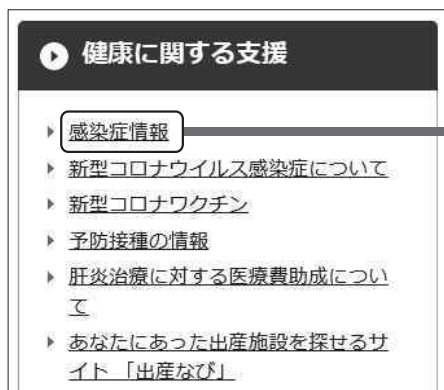


1. 今、どんな感染症が流行っているか

まず、日本国内で流行し注意が必要な感染症については、厚生労働省が“トップページの”感染症情報”に注意喚起および関連情報を掲載している（図1）。2025年6月現在、感染者が増加している百日咳・伝染性紅斑について、疾患等情報や海外渡航者への注意喚起情報が冒頭に掲示されている（図2）¹⁾。

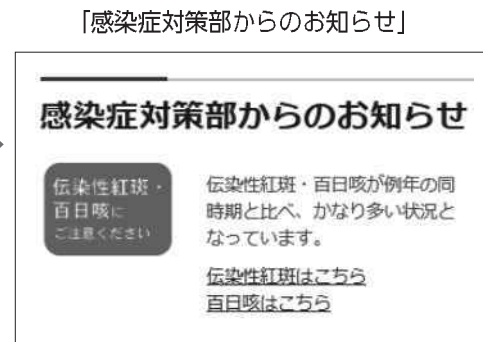
また、国立健康危機管理研究機構（JIHS）のサーベイランスが毎週更新されている²⁾。

図1 厚生労働省 トップページ「感染性情報」



<https://www.mhlw.go.jp/index.html>

図2 厚生労働省＞感染症情報¹⁾



2025年6月6日現在

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/index.html

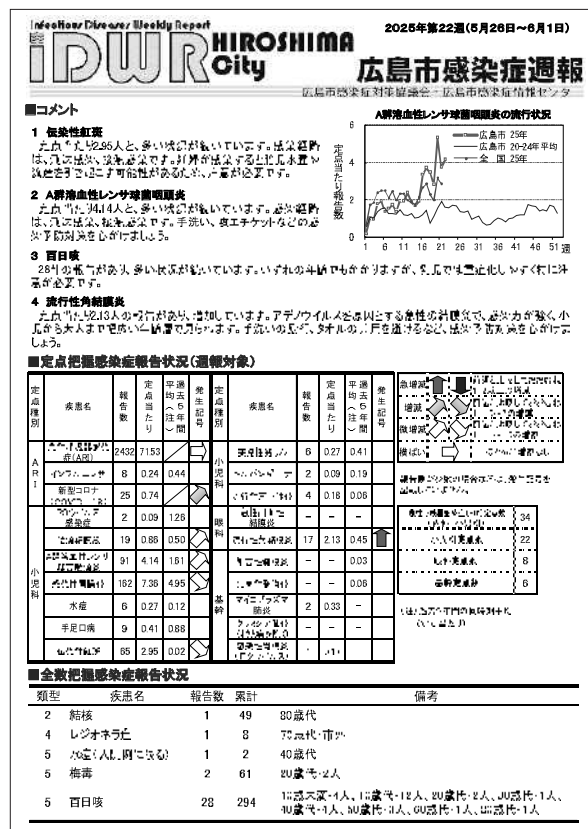
次に、広島県内での流行情報については、広島県が“広島県感染症・疾病管理センター（ひろしまCDC）＞感染症週報”から、タイムリーに情報発信している。本サイト内の「感染症発生動向調査」では、「感染症週報」が毎週木曜午後更新され、最新のサーベイランスの結果をA4 1枚で確認できる（図3）³⁾。最寄りの居住地でも感染状況を発信している行政区もあり、広島市では毎週水曜日に情報発信している⁴⁾。

図3 広島県感染症発生動向週報³⁾ 6月5日（木）掲載



図4 広島市感染症週報⁴⁾

6月4日（水）掲載



広島県感染症・疾病管理センター（ひろしまCDC）＞感染症週報（バックナンバー）
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hcdc/hids-c/kanzya-zyouhou-syukkaisai.html>

広島市感染症情報センター＞広島市感染症週報
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/living/eisei/1003071/1029931/index.html>

2. その感染症は、どんな病態で、どのような治療をするのか

薬局現場で求められる、すばやく、適切な、最新の情報を入手し、対応するために、事例を用いながら解説する。

■感染症の概要、疫学、臨床像、治療、予防について、参考にできるサイト、書籍としては

- Webサイト
 - 感染症情報提供サイト（国立健康危機管理研究機構（JIHS））
 - 日本感染症学会 発信情報（ex. 症状からアプローチするインバウンド感染症への対応等）
 - 感染症等関連学会の診療ガイドライン、学会からの注意喚起等
 - 疾患の関連学会の診療ガイドライン～Mindsガイドラインライブラリ（日本医療機能評価機構）を活用
- 書籍
 - 『JAID/JSC感染症治療ガイド2023』（日本感染症学会・日本化学療法学会 発行）⁵⁾
 - 『今日の治療指針2025』（医学書院）〈電子版あり〉⁶⁾
 - 疾患毎／関連学会の診療ガイドライン等

<事例1>

「百日咳」ってどんな感染症？どのような治療をするのか？

今年は、百日咳の感染増加が報告され、広島県においても小児だけでなく、成人でも増加しており^{3) 4)}、対応について情報収集が必要である（図3）。

そこで、まず参考にしたのは、感染状況情報等含め、国立健康危機管理研究機構（JIHS）である。

JIHSからは、現状を踏まえ、感染症情報提供サイトに「百日咳の発生状況について」と題して、次のような内容が掲載された（2025年4月22日時点）⁷⁾

「百日咳の発生状況について」

概要

百日咳とは

百日咳の発生状況

国外における発生状況

国内における発生状況

百日咳菌の細菌学的知見

百日咳菌の流行株の細菌学的特徴

百日咳菌の抗菌薬耐性

リスク評価と対応

国立健康危機管理研究機構（JIHS）感染症を探す＞疾患名から探す＞ハ行＞百日咳＞リスク評価＞百日咳の発生状況について⁷⁾
https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ha/pertussis/020/2504_pertussis_RA.html

この中で、薬物療法については、従来より第一選択薬としてマクロライド系抗菌薬が選択されているが、耐性菌の検出が増えており、その代替薬として、Trimethoprim-sulfamethoxazole（ST合剤）の使用が推奨されている。ST合剤が使用できない患者にはミノサイクリンやキノロン系抗菌薬が抗菌薬の選択肢となるかもしれないと記載されている⁷⁾。

また、百日咳で重篤化が問題となる新生児等に対する注意喚起として、「日本周産期・新生児医学会」からも、マクロライド系抗菌薬の耐性菌増加に伴う対応として、次のような内容が発信されている（2025年5月9日）。

百日咳の流行とマクロライド耐性株への注意喚起

「〔抜粋〕マクロライドに加えST合剤の併用を考慮する必要がある。但し、ST合剤は、低出生体重児、新生児、妊婦には原則禁忌であることに注意が必要である。現時点でMRBP*に対する標準治療として確立されたものではないが、薬剤感受性試験ではミノサイクリンやキノロン系抗菌薬に対して感受性が確認されており、ST合剤が使用できない患者にはこれらの薬剤が選択肢となるかもしれない。静注薬ではピペラシリン・タゾバクタムおよびセフォペラゾン・タゾバクタムの小児MRBP感染症に対する治療効果が示唆されている。」

* MRBP : macrolide-resistant *Bordetella pertussis* マクロライド耐性百日咳菌

日本周産期・新生児医学会＞学会からのお知らせ＞百日咳の流行とマクロライド耐性株への注意喚起⁸⁾より引用
https://www.jsppm.jp/modules/notice/index.php?content_id=152

加えて、同学会からは、DPT ワクチンの供給現状および重症化リスクの高い早期乳児や希望する妊婦への優先接種の依頼についてステートメントが発信されている（2025年5月21日 https://www.jspnm.jp/modules/notice_r/index.php?content_id=361）。

<事例2>

泌尿器科からの処方箋に「ケフレックス®(セファレキシン)」と記載されている。高齢女性。患者から聴き取り、膀胱炎とのこと。現在、ケフレックス®は在庫なく、入手できない。代替薬として何を提案すればいいのか。同じセフェム系のケフラール®(セファクロル) なら、在庫があるが…

☞ 尿路感染症は、薬剤耐性が進んでいることから、抗菌薬選択に考慮が必要である。

☞ ケフレックス®がセフェム系だから、同じセフェム系が適切とは限らない。

まず、薬剤耐性（AMR: Antimicrobial Resistance）については、世界的に耐性化を防ぐために、適正使用の流れが強化されてきている。WHOはAMRに対する取り組みとして、AWaRe（アウエアー）分類（Access、Watch、Reserve）*を提唱し、抗菌薬使用量のAccessの割合が60%以上になることを目標に定めている。これを踏まえ、日本において、2024年4月の診療報酬改定により抗菌薬の使用実績に基づく新たな評価制度が導入され、抗菌薬適正使用体制加算（5点）が新設された⁹⁾。AWaRe分類の抗菌薬は、AMR臨床リファレンスセンターサイト内に掲載されている¹⁰⁾。

*AWaRe（アウエアー）分類

- ・ Access : 一般的な感染症の第一選択薬
- ・ Watch : 耐性化が懸念されるため限られた適応に使うべき薬
- ・ Reserve : 最後の手段として保存する薬

次に、本事例は外来治療ということで、COVID-19感染拡大時にも情報発信をされていた“日本プライマリ・ケア連合学会”の「プライマリ・ケアのための感染症情報サイト」>感染症の治療¹¹⁾を参照する。外来経口抗菌薬選択時のいくつかの注意点があげている。その中で、次の2点に着目し、解説する。

✓ バイオアベイラビリティ（bioavailability）が十分か

✓ 不必要な抗菌スペクトラムがになっていないか：第3世代セフェムやニューキノロン

バイオアベイラビリティ（静注抗菌活性と比較してどの程度効果があるか）が良好であることが、外来経口抗菌薬として有効性に期待でき、安心して使用できる。処方箋に記載のあったセファレキシン（ケフレックス®）は、第一世代セフェム系抗菌薬で、スペクトラムも広域でなく、バイオアベイラビリティが良好あるため、選択されたと考えられる¹²⁾¹³⁾。一方、第二、第三世代セフェム系抗菌薬は、抗菌スペクトラムが広がり、バイオアベイラビリティがそれほど高くないため、同様な効果が期待しにくい。日本プライマリ・ケア連合学会やAMR臨床リファレンスセンターに掲載されている経口内服抗菌薬では、Accessに分類されるのは、セファレキシンとなっており（表1）、第二世代セフェム系のセファクロル（ケフラール®）はWatchに分類されている。

表1 AWaRe 分類 内服薬—セフェム系（AMR 臨床リファレンスセンター）

分類	薬物分類	一般名称	一般名称（英語）	主な販売名
Access	第1世代セファロスポリン	セファレキシン	cefalexin	ケフレックス®
Access	第1世代セファロスポリン	セフロキサジン	cefroxadine	オラスポア小児用DS®
Watch	第2世代セファロスポリン	セフロキシム	cefuroxime	オラセフ®
Watch	第2世代セファロスポリン	セファクロル	cefaclor	ケフラール®
Watch	第2世代セファロスポリン	セフォチアム	cefotiam	(注射剤のみ)
Watch	第3世代セファロスポリン	セフィキシム	cefixime	セフспан®
Watch	第3世代セファロスポリン	セフポドキシム	cefpodoxime	パナン®
Watch	第3世代セファロスポリン	セフジニル	cefdinir	セフゾン®
Watch	第3世代セファロスポリン	セフジトレン	cefditoren	メイアクト®
Watch	第3世代セファロスポリン	セフカペン	cefcapene	フロモックス®
Watch	第3世代セファロスポリン	セフテラム	cefteram	トミロン®

・本表は国内で使用されている抗菌薬を WHO の推奨する AWaRe 分類1に当てはめて作成。

*更新時時点で、販売終了品目は除く

AMR 臨床リファレンスセンター 2024年11月作成より抜粋

加えて、AWaRe分類のAccessに分類され、「膀胱炎の適応症あり」抗菌薬を表2に示す。

表2 AWaRe 分類 内服薬—Access に分類されている抗菌薬「膀胱炎の適応症あり」

分類	薬物分類	一般名称	一般名称（英語）	主な販売名
Access	テトラサイクリン	ドキシサイクリン	doxycycline	ビブラマイシン [®]
Access	テトラサイクリン	テトラサイクリン	tetracycline	アクロマイシン [®]
Access	アンフェニコール	クロラムフェニコール	chloramphenicol	クロラムフェニコール [®]
Access	ペニシリン	アンピシリン	ampicillin	ピクシリン [®]
Access	ペニシリン	アモキシシリン	amoxicillin	サワシリン [®]
Access	ペニシリン	バカンピシリン	bacampicillin	ペンゲッド [®]
Access	ペータラクタマーゼ阻害剤配合ペニシリン	アモキシシリン／クラブラン酸	amoxicillin and clavulanic acid	オーグメンチン [®]
Access	ペータラクタマーゼ阻害剤配合ペニシリン	スルタミシリン	sultamicillin	ユナシン [®]
Access	第1世代セファロスポリン	セファレキシン	cefalexin	ケフレックス [®]
Access	第1世代セファロスポリン	セフロキサジン	cefroxadine	オラスポア小児用DS [®]
Access	ST合剤	スルファメトキサゾール／トリメトプリム	sulfamethoxazole and trimethoprim	バクタ配合錠 [®]

・本表は国内で使用されている抗菌薬を WHO の推奨する AWaRe 分類1に当てはめて作成。
 * 更新時時点で、販売終了品目は除く
 AMR 臨床リファレンスセンター 2024年11月作成より抜粋

上記情報等を踏襲し、次の2つの情報源を参照し、代替薬について検討した。

その1. 書籍『今日の治療指針2025』⁶⁾ (毎年情報更新)

膀胱炎に対して2か所に記載がある。

① 『第19章：泌尿器科疾患＞膀胱炎』の項の記載（『JAID/JSC感染症治療ガイド2023』を参照）。

グラム陰性桿菌のESBL*産生菌およびキノロン耐性菌の割合は増加傾向にあり、単純性膀胱炎の場合、原因菌が不明な場合には、BLI*配合ペニシリン系が第一選択。

本事例の高齢女性の原因菌は、グラム陽性球菌の割合が低く、大腸菌のキノロン耐性率が高い。

*ESBL：基質特異性拡張型β-ラクタマーゼ
 *BLI：β-ラクタマーゼ阻害剤

〈高齢女性（閉経後）の膀胱炎〉

第1選択、または原因菌が不明である場合

アモキシシリン・クラブラン酸（オーグメンチン[®]）配合錠250RS

アモキシシリン・クラブラン酸に感受性がないグラム陽性球菌が疑われるか検出されている場合

- ・レボフロキサシン（クラビット[®]）錠
- ・シプロフロキサシン（シプロキサン[®]）錠
- ・トスフロキサシン（オゼックス[®]）錠

ESBL非産生グラム陰性桿菌が疑われるか検出されている場合

- ・セファクロル（ケフラール[®]）カプセル
- ・セフジニル（セフゾン[®]）カプセル
- ・セフカペン（フロモックス[®]）錠
- ・セフジトレン（メイアクトMS[®]）錠
- ・セフポドキシムプロキセチル（パナン[®]）錠

ESBL産生の大腸菌などに対するdefinitive therapy

- ・ホスホマイシンカルシウム（ホスミシン[®]）錠
- ・ファロペネム（ファロム[®]）錠

② 『付録1：抗菌薬による感染症の外来治療＞Ⅲ. 尿路感染症の外来治療』の項の記載
 原因菌は80%が大腸菌。

単純性膀胱炎の治療薬として、第1選択は第1～2世代セファロスポリン系またはST合剤

- ・ケフレックス[®]（セファレキシン）
- ・オラセフ[®]（セフロキシム）
- ・バクタ[®]（スルファメトキサゾール／トリメトプリム）

その2.『女性下部尿路症状診療ガイドライン〔第2版〕』（2025年アップデート）¹⁴⁾

患者背景を鑑みて本ガイドラインを参照する。

「CQ19 再発性細菌性膀胱炎にはどのように対処すべきか？

⇒ … ③高齢女性（閉経後）の膀胱炎に対する第一選択薬は、キノロン耐性率が高いことより、第一選択薬はBLI 配合ペニシリン系薬とし、尿培養・薬剤感受性を参考とする。〔推奨グレード B〕

第一選択としてはセフェム系薬または BLI 配合ペニシリン系薬が推奨され、ESBL 非産生グラム陰性桿菌が疑われる場合は、セフェム系薬を使用する。グラム陽性球菌が確認されている場合にはキノロン系薬を選択する。ESBL 産生菌に対しては、経口抗菌薬としてはファロペネム、ホスホマイシンなどが有効である。」（女性下部尿路症状診療ガイドライン〔第2版〕より引用）

以上の情報を参照し、オーグメンチン[®]（アモキシシリン・クラバン酸）、ユナシン[®]（スルタミシリン）、バクタ[®]（スルファメトキサゾール／トリメトプリム）、オラセフ[®]（セフロキシム）等がケフレックス[®]代替薬の候補としてあげられる。

3. 感染症について、学ぶ

感染症について、Webコンテンツで学べるものをいくつか紹介する。

感染症対応に係る薬局の研修について (厚生労働省)		
感染症情報提供サイト (国立健康危機管理研究機構 (JIHS)) ¹⁵⁾	疾患名／感染源や特徴から感染症毎に病態、薬物療法等の情報を提供	
薬剤耐性 (AMR) について学ぼう！ (AMR臨床リファレンスセンター)	平易な説明で、感染対策全般を把握できる (図5)	
予防接種に関する情報 (日本ワクチン産業協会)	ワクチンについて、一般向け、医療関係者向けに資料を提供 (含QA)	

図5 薬剤耐性 (AMR) について学ぼう！ (AMR 臨床リファレンスセンター)



まとめ

感染症は、突如として流行することがあります。今、この地域でどのような感染症が流行しているのか、そして、その感染症の最新の薬物療法について把握しておくことは、医療関係者や患者さんとの信頼関係を築く上で重要です。薬局では、今回は何故抗菌薬が処方されなかったのか、また、処方された抗菌薬の服用期間や起こり得る有害事象やその対応等について、薬剤師が説明することで、患者が納得したうえで治療に専念できるようになり、自己中断を防ぐことができます。さらに、こうした説明は抗菌薬の適正使用を促し、AMR対策にもつながります。新興感染症のみならず、既存の感染症についても、感染症関連情報—流行状況／疾患・病態／最新の薬物療法（耐性菌対策含む）／予防方法等—を常日頃からウォッチングし、知識をアップデートしていただきますよう、そして、本稿がその一助になれば幸いです

※本情報は、2025年6月6日現在の知見に基づいて執筆。

※各サイトは、2025年6月6日に確認。

引用文献

参考情報	
1) 厚生労働省：感染症情報 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou/index.html	
2) 感染症情報提供サイト（国立健康危機管理研究機構（JIHS））＞サーベイランス＞感染症発生動向調査週報 https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/idwr/index.html	
3) 広島県感染症・疾病管理センター（ひろしま CDC）＞感染症週報（バックナンバー） https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/hcdc/hidsc-kanzya-zyouhou-syuukaiseki.html	
4) 広島市感染症情報センター＞広島市感染症週報 https://www.city.hiroshima.lg.jp/living/eisei/1003071/1029931/index.html	
5) 日本感染症学会・日本化学療法学会：JAID/JSC 感染症治療ガイド2023，第1版，杏林社，東京，2023	
6) 福井次矢・高木誠・小室一成：今日の治療指針2025，2025年版，医学書院，東京，2025	
7) 国立健康危機管理研究機構（JIHS）：百日咳の発生状況について https://id-info.jihs.go.jp/diseases/ha/pertussis/020/2504_pertussis_RA.html	
8) 日本周産期・新生児医学会：百日咳の流行とマクロライド耐性株への注意喚起 https://www.jspnm.jp/modules/notice/index.php?content_id=152	
9) 厚生労働省保険局医療課：令和6年度診療報酬改定の概要【ポストコロナにおける感染症対策】 https://www.mhlw.go.jp/content/12400000/001224802.pdf	
10) AMR 臨床リファレンスセンター：抗菌薬使用サーベイランス Japan Surveillance of Antimicrobial Consumption (JSAC) 抗菌薬マスター（2024.12.23更新） https://amrcrc.ncgm.go.jp/surveillance/030/20181128172757.html	
11) 日本プライマリ・ケア連合学会 感染症委員会：「プライマリ・ケアのための感染症情報サイト」＞感染症の治療＞抗菌薬の選択 https://www.jpca-infection.com/news-detail.php?nid=33	

12) 大野 博司：高齢者における抗菌薬の考え方，使い方 経口薬編，日本老年医学会雑誌 2011；48：452-456

13) 西 圭史：抗生物質の基本的知識，日本臨床麻酔学会誌 2017；37：687-694

14) 日本排尿機能学会：女性下部尿路症状診療ガイドライン [第2版]
<https://japanese-continence-society.or.jp/information/guidelin/409/>



15) 国立健康危機管理研究機構 (JIHS)：感染症情報提供サイト
<https://id-info.jihs.go.jp/>



ご案内

薬事情報センター Web サイトでは、公的機関等が発信している情報の『お役立ちリンク集』を掲載しています。是非、ご活用下さい。

薬事情報センター Web サイト > お役立ちリンク集
<https://hiroyaku.jp/di/links/>



★は、今回の原稿で参照したサイトです

	大分類	リンクされている情報
★	感染症情報	広島県のローカル情報、感染症関連情報、AMR 等
	医薬品 適正使用情報	医薬品の安全性関連、妊娠・授乳と薬情報
	プレアボイド関連サイト	薬局ヒヤリ・ハット事例、医療事故情報事例
★	医薬品情報 データベース	医療用医薬品情報検索／一般用医薬品情報検索、承認情報、新薬情報、保険適応、適応外保険適用、セルフメディケーション、文献検索 (J-STAGE、CiNii)
★	医薬品関連サイト	厚生労働省、PMDA、製薬協、日薬連、日漢協、PhRMA、ジェネリック製薬協
★	医療関連サイト	各種疾患病態治療に係る情報、Minds ガイドラインライブラリ
	もっと知りたいお薬のこと	県民向けにわかりやすい内容で、患者説明時に活用できる薬のしおり、セルフメディケーション、健康食品、健康情報、海外渡航時の医薬品の携帯持込等、海外渡航時感染症
	医療相談・医療機関検索	県民向けに相談先を紹介 医療安全支援センター、心の電話相談、医療機関検索
	中毒情報検索	中毒発生時の一次対応情報 (日本中毒情報センター)、食中毒
	アンチ・ドーピング関連	ドーピング禁止薬検索サイト、薬剤師のためのガイドブック、スポーツファーマシスト検索、関係機関

薬事情報センターのページ

“新しく”、“適切な” 医薬品等情報の入手と提供（第32回） 『うっかりドーピング』から、アスリートを守る ～情報入手、情報発信について～

薬事情報センター Webサイト
〈スマホ画面〉



※本情報は、2024年12月9日現在の知見に基づいて執筆。

※各サイトは、2024年12月9日に確認。

※本原稿は、第43回広島県薬剤師会学術大会発表内容を一部引用。

薬事情報センターWeb
サイトは、スマートフォン
でも閲覧可能です。



広島県薬剤師会薬事情報センターでは、DI業務として、医薬品、中毒、ドーピング、及び医学薬学関連情報等の収集や提供を実施しています。情報提供の対象は、一般の広島県民、及び医療関係者です。広島県民からは電話等（アンチ・ドーピングホットラインはFAXまたはEメール）、医療関係者からは電話、FAX、Eメールで相談質疑を受け付け、対応し、加えて薬事情報センター Webサイトを通じて広く情報支援を行っています。

広島県薬剤師会アンチ・ドーピングホットラインは、2005年に発足して以来20年間、広島県におけるアンチ・ドーピング活動の拠点として活動をしてきました。多くのアスリートやスタッフ、医療関係者から信頼いただき、現在も活動を続けております。

今回は、20年の活動を振り返り、また、日々、薬局に訪れる“スポーツをしているかかりつけ患者さん”を、どうすれば『うっかりドーピングから守れるか』について、ご紹介して参ります。

1. 広島県薬剤師会アンチ・ドーピングホットラインの活動の実際

～問合せ対応から啓発活動まで（過去20年間の実績）～

まずは、アンチ・ドーピングホットラインの位置づけ（図1）をご紹介します。

図1 薬剤師会アンチ・ドーピングホットラインの位置づけ

「薬剤師のためのアンチ・ドーピングガイドブック」（日本薬剤師会）から引用

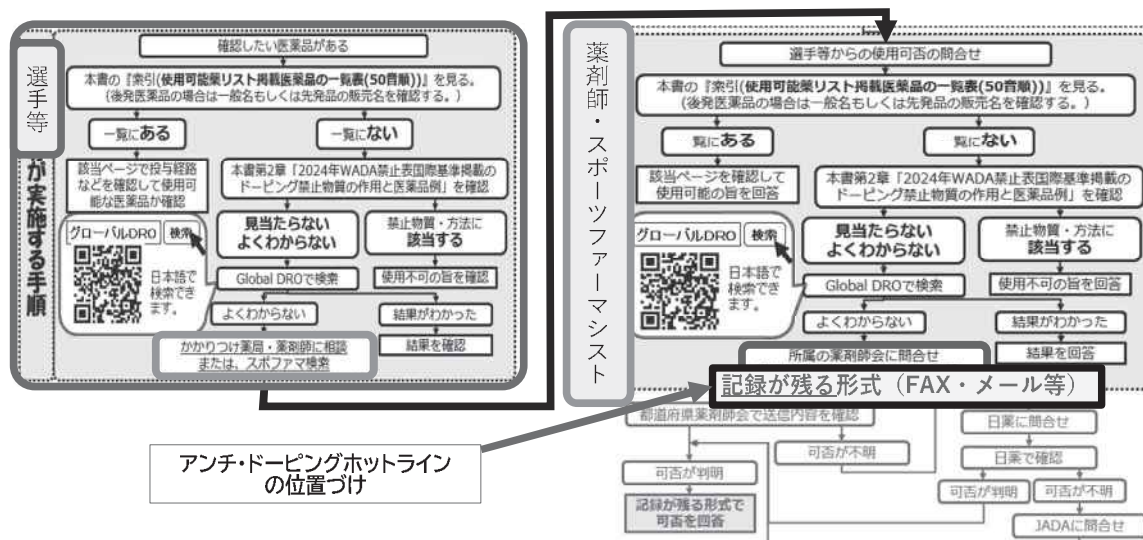
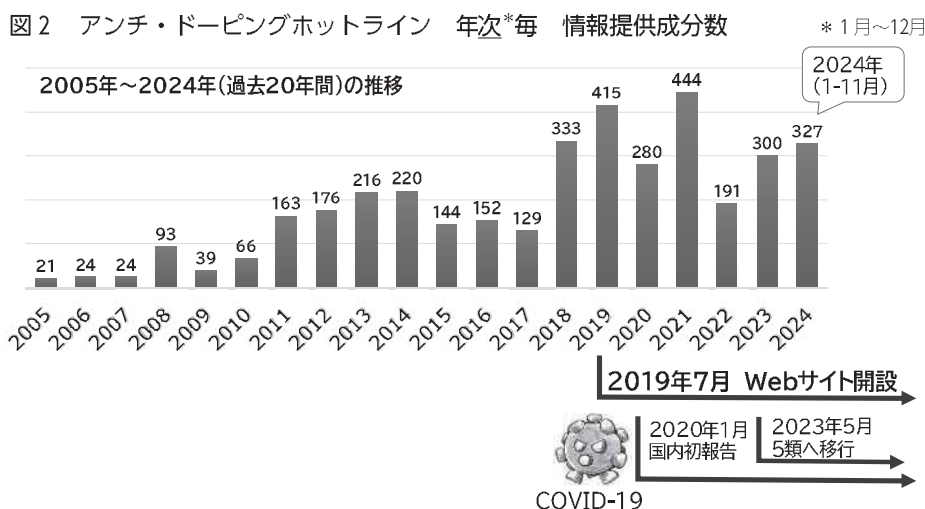


図1に示す通り、選手等は、ドーピング禁止薬か否かを自らで調べ、判断がつかない場合、まずはかかりつけ薬局・薬剤師に相談します。かかりつけ薬局・薬剤師が、判断がつかない場合に、所属薬剤師会のアンチ・ドーピングホットラインに問合せます。謂わば、ドーピング判断における広島県の最後の砦として位置づけられており、日本薬剤師会やJADAと協力し責任をもって回答しています。その際、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）の情報サイトや「薬剤師のためのアンチ・ドーピングガイドブック」（日本薬剤師会）¹⁾を活用します。

- 1) 日本薬剤師会.『薬剤師のためのアンチ・ドーピングガイドブック 2024年版』,
<https://www.nichiyaku.or.jp/activities/anti-doping/about.html>, 2024年12月9日参照

1) 広島県薬剤師会アンチ・ドーピングホットライン 問合せ対応の現状

① 情報提供 成分数の推移 (図2)



2005年に発足後、県内のアスリートやトレーナー、スポーツドクターにアンチ・ドーピングホットラインの存在が次第に伝わり、問合せ数が増えてきました。2019年7月に薬事情報センター Webサイトリニューアルに伴う「アンチ・ドーピングホットライン」サイトの開設後は、更に問合せが増加しました。東京オリンピック2020の事前合宿に関連した問合せもありました。ところが、2020年1月に国内でCOVID-19感染者が報告され、国内外でスポーツ大会が自粛されるに伴い、問合せが減少しました。しかし、2023年5月に5類感染症に移行後は、再びスポーツが盛んに行われるようになり、ホットラインへの問合せも急増しております。

② 情報提供先について

- ・ 質問者の属性は、トレーナーが約4割、薬剤師が2割、次いで選手、医師の順です。
 病院薬剤部、整形外科クリニック、整形外科病院、スポーツチーム等が、リピーター質問者です。
- ・ 質問者の競技は、サッカー、バレーボール、ハンドボール、テニス等で、20年間では53競技に及んでいます。

③ 情報提供内容について

- ・ 医療用医薬品だけでなく、一般用医薬品、また、漢方薬についての問合せもあります。
- ・ 食品であるサプリメントについても、時に問合せがあります。
- ・ 医師からの問合せは、スポーツドクターとして支援される大会への協力要請やTUE申請の相談等です。

2) アンチ・ドーピング 啓発活動

① 対面での啓発活動

a. スポーツ大会での啓発活動

広島県薬剤師会アンチ・ドーピング活動推進委員会の活動として、各種スポーツ大会において、啓発ブースの出展やドーピング禁止薬の判断のホットライン*として活動しました。

ASTCアジアトライアスロン選手権（廿日市市で開催）では、表1に示す様に2回に渡って大会に協力及び啓発活動を実施しました。2016年には対面で啓発活動を実施したことで、課題発掘もできました²⁾。次いで、2020年にも大会事務局から協力依頼があったため、同様の活動計画を立案しましたが、まさにCOVID-19感染拡大の影響を受け、活動の一部は電子媒体での対応となりました。

*ここでのホットラインとは、ドーピング禁止薬か否かを判定する作業

表1 ASTC アジアトライアスロン選手権におけるアンチ・ドーピング啓発活動
～2016年、2020年の比較～

開催年	開催前の活動	大会当日の活動
2016年	- 選手宿泊ホテルの常備薬チェック ⇒医薬品リストのチェック - 周辺薬局／薬店でのアンチ・ドーピング啓発 ⇒研修会を開催	- 啓発ブース出展 - ホットライン*を会場に開設
2020年	- 選手宿泊ホテルの常備薬チェック ⇒医薬品リストのチェック - 周辺薬局／薬店でのアンチ・ドーピング啓発 ⇒研修会を開催予定したが中止 ⇒啓発動画を作成・発信	- 啓発ブース出展 ⇒中止 - ホットライン*を会場に開設 ⇒薬事情報センターで対応

*ホットラインとは、その場でドーピング禁止薬か否かを判定する作業

2) 泉谷悟ほか(広島県薬剤師会 アンチ・ドーピング活動推進委員会). ASTCアジアトライアスロン選手権2016/廿日市におけるアンチ・ドーピング活動報告. 日本薬剤師会雑誌 2018: 70: 31—32.

b. 講演を通じた啓発活動

この20年間で、スポーツトレーナー協会所属のトレーナー向けに薬事情報センター職員による講演や、アンチ・ドーピング活動推進委員からのスポーツチーム選手への講習、県民公開講座の企画開催、薬剤師向け研修会の開催等を実施してきました。これら講演を通じて、県民や薬剤師に対面で啓発活動を行っています。

② 電子媒体を利用した啓発活動

a. Webサイトからの発信

薬事情報センター Webサイト内に「アンチ・ドーピングホットライン」のサイトを開設し、ホットラインへの問合せ方法、各種関連サイトのリンク集を掲載し、ドーピングに関する情報発信を実施しています。加えて、県民にもわかりやすく伝えるために啓発用まんが(図3)を作成、掲載しております。

b. メールマガジンの配信

各種啓発活動を行うには、スポーツに関心のある薬剤師と連携することが必要です。そこで、アンチ・ドーピング活動推進委員会では、スポーツファーマシストだけでなく薬剤師を対象に、月に1回以上、最近のトピックス等を中心にメールマガジンを配信することを決定し、2019年から開始しました。現在までに、70回の配信を行っています。

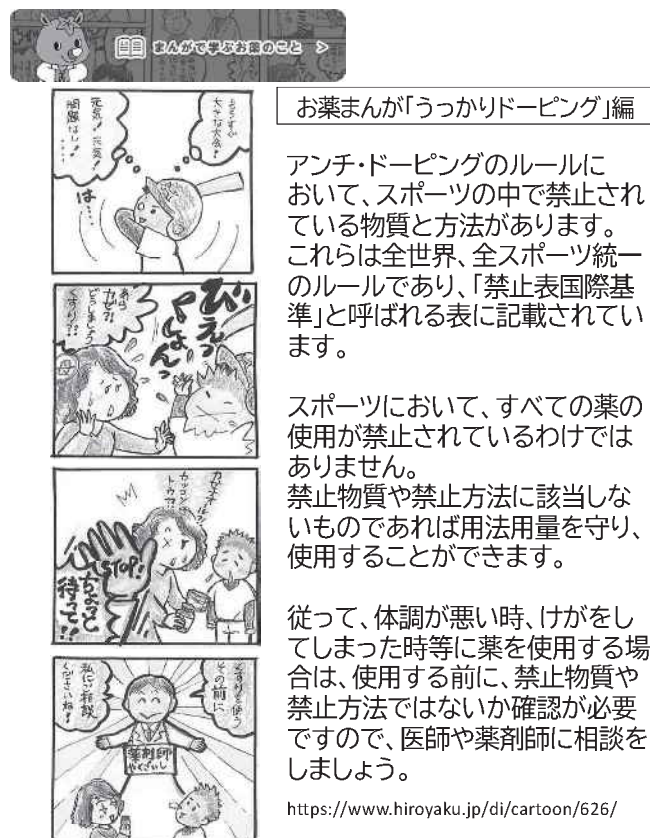
☆関心のある方は、後述「アンチ・ドーピングメールマガジン 登録方法」を参照され、ご登録下さい。

c. オンラインセミナーの開催

スポーツファーマシストを対象に、JADA主催オンラインセミナーを開催しました(延べ9回)。

図3 県民向けアンチ・ドーピング啓発まんが

薬事情報センター>アンチ・ドーピングホットライン>まんがで学ぶお薬のこと



2. ドーピングか否かを判定する具体的な検索方法

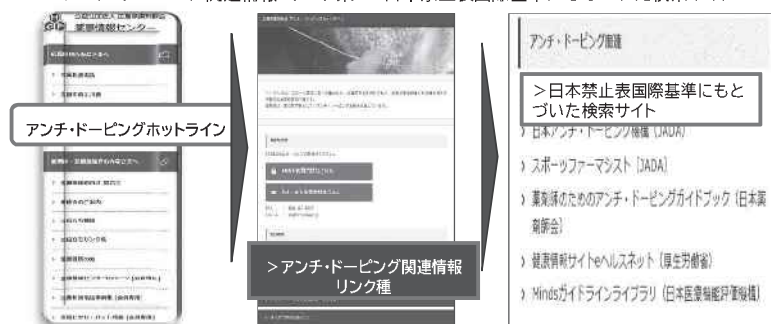
アスリートが服用する医薬品を「禁止表国際基準 (global DRO)」で、成分毎に確認します (図4)。

図4 ドーピング判定の手順

手順	参考サイト
1. 医薬品の「成分名」を調べる	PMDA ・医療用医薬品 電子化された添付文書等 ・一般用医薬品・要指導医薬品 添付文書等
2. それぞれの成分を「禁止表」で確認する	・JADA 日本禁止表国際基準にもとづいた検索サイト(=global DRO) https://www.globaldro.com/JP/search ・日本薬剤師会 薬剤師のためのアンチ・ドーピングガイドブック(最新版) https://www.nichiyaku.or.jp/activities/anti-doping/index.html

* 禁止表国際基準は、毎年1月1日に○●年版が発行されます。
その後も、随時変更されるため、必ず、最新の情報で検索、確認することが重要です。

薬事情報センターWebサイトから > アンチ・ドーピングホットライン
> アンチ・ドーピング関連情報 リンク集 > 日本禁止表国際基準にもとづいた検索サイト



> アンチ・ドーピングホットライン > アンチ・ドーピングホットライン > 日本禁止表国際基準にもとづいた検索サイト(=global DRO)



global DROの画面で
・ユーザータイプ～質問者のタイプ
・競技～競技名
・購入国～国名
・検索～成分名
を入力し、検索する

その際の注意点として、①スポーツによって禁止されている成分も異なるため、スポーツの種類も確認が必要です。また、②競技会時、競技会外でも禁止か否かが異なります。加えて、③一般用医薬品では、商品名が似通ったものが多く、それぞれの含有成分が異なるため、確実な名称を確認する必要があります。本県薬会誌「お薬相談電話事例集 No.151」でもご紹介している通り、必ず、EメールかFAXで、正確な情報を入手します。

判断においては、図4に示す禁止表国際基準 (global DRO) を使って、随時確認します。参考資料として、日本薬剤師会が発行している「薬剤師のためのアンチ・ドーピングガイドブック (最新版)」を使用できます。但し、禁止表国際基準は、毎年1月1日に改訂され発行されます。その後も、随時変更されることがあるため、必ず、最新の情報で確認することが重要です。

尚、アンチ・ドーピングのルールにおいては、禁止されているのは「物質」だけでなく、「方法」もあります。「方法」には、輸血や静脈内注射、遺伝子／細胞ドーピング等があります。詳細は、「(最新版) 禁止表国際基準」に掲載されている「物質」と「方法」をご確認ください。

但し、治療のためにどうしても禁止物質を使用するときは、事前にTUE (治療使用特例) 申請をして使用することができます。TUE申請含め、医療関係者としてアンチ・ドーピングに関わることの詳細については、JADA (日本アンチ・ドーピング機構)「医療関係の方」のWebサイトをご参照ください。

医療関係者の方 (JADA)	https://www.playtruejapan.org/medical/
----------------	---

【選手のための教育受講について】

2023年度より国体・国スポにおけるアンチ・ドーピング教育の受講が義務化されました。日本スポーツ協会（JSPO）のサイトで、動画が紹介されています。将来のトップアスリートにも是非、ご紹介ください。

JADA作成 アンチ・ドーピング教育動画（JSPO）	https://www.japan-sports.or.jp/medicine/doping/tabid1395.html
-------------------------------	---

最後に

まずは、かかりつけ薬局・薬剤師が、かかりつけ患者さんを『うっかりドーピング』から守る上で、大変重要な役割者となります。スポーツファーマシストやアンチ・ドーピングホットラインに相談しながら、正確な情報提供を実施し、『うっかりドーピング』からアスリートを守りましょう。

また、今年はスポーツ大会で、啓発ブースを設置する計画を企画中です。詳細が決まり次第ご連絡させていただきます。是非、一緒に活動しましょう。

謝意

これら活動において、広島県薬剤師会アンチ・ドーピング活動推進委員会の委員の先生方、広島県で、アンチ・ドーピングについて先駆けとして活動され、県内のプロスポーツ団体等からも信頼を得るなど、礎を築いて下さった前薬事情報センター長の原田修江先生、そして現在、アンチ・ドーピングホットラインを中心的に活動している薬事情報センター永野利香先生に、あらためて、深く感謝申し上げます。

本稿の内容は、第43回広島県薬剤師会学術大会（2024年10月27日開催）にて発表した内容を一部引用しております。

ご案内

1. アンチ・ドーピング メールマガジンの登録方法

◆メールマガジンの概要

提供情報	アンチ・ドーピングに関する情報等をタイムリーに提供 ・違反事例、禁止物質混入情報等 ・QA 事例等 ・研修会、講習会等情報 ・スポーツファーマシストの活動の場 関連情報
提供方法	Eメール（月1回程度）
登録対象者	広島県薬剤師会会員で、アンチ・ドーピングに興味のある方 ※スポーツファーマシストでなくても登録可能です。

◆メールマガジン登録方法

次の項目（8項目）を確認し、Eメールにて登録下さい。

Eメール件名	「アンチ・ドーピング メールマガジン登録」
Eメール送付先	anti-doping@hiroyaku.or.jp
記載事項	① 氏名およびふりがな ② 登録用 E メールアドレス ③ 勤務先、ご所属 ④ 連絡先 電話番号 ⑤ 所属地域薬剤師会名 ⑥ 興味のあるスポーツ ⑦ スポーツファーマシスト認定取得（はい／いいえ） ⑧ 備考（スポーツファーマシストとしての活動実績等）



2. 薬事情報センター Web サイトでは、公的機関等が発信している情報の『お役立ちリンク集』を掲載しております。是非、ご活用下さい。

薬事情報センター Web サイト > お役立ちリンク集
<https://hiroyaku.jp/di/links/>



大分類	リンクされている情報
感染症情報	広島県のローカル情報、感染症関連情報、AMR 等
医薬品適正使用情報	医薬品の安全性関連、妊娠・授乳と薬情報
プレアボイド関連サイト	薬局ヒヤリ・ハット事例、医療事故情報事例
医薬品情報データベース	医療用医薬品情報検索／一般用医薬品情報検索、承認情報、新薬情報、保険適応、適応外保険適用、セルフメディケーション、文献検索 (J-STAGE、CiNii)
★ 医薬品関連サイト	厚生労働省、PMDA、製薬協、日薬連、日漢協、PhRMA、ジェネリック製薬協
医療関連サイト	各種疾患病態治療に係る情報、Minds ガイドラインライブラリ
もっと知りたいお薬のこと	<u>県民向けにわかりやすい内容で、患者説明時に活用できる</u> 薬のしおり、セルフメディケーション、健康食品、健康情報、 海外渡航時の医薬品の携帯持込等、海外渡航時感染症
医療相談・医療機関検索	<u>県民向けに相談先を紹介</u> 医療安全支援センター、心の電話相談、医療機関検索
中毒情報検索	<u>中毒発生時の一次対応情報</u> (中毒情報センター)、食中毒
★ アンチ・ドーピング関連	ドーピング禁止薬検索サイト、薬剤師のためのガイドブック、 スポーツファーマシスト検索、関係機関

【本件に関する問合せ先】：

広島県薬剤師会 薬事情報センター「アンチ・ドーピングホットライン」

電話：082-567-6055、 Web サイト：<https://www.hiroyaku.jp/di/hotline/>